

保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第5報

——平成25年度の大型紙芝居制作・発表を中心に——

高杉志緒

The Fifth Action-Training Report on “*Shokuiku*”
Centered on the Production and Presentation of
“Large Scale Picture-Story Shows” held in Fiscal Year 2013
at the Department of Early Childhood Education and Care Seminar

by
Shio Takasugi

要旨

本稿は、平成25（2013）年度における保育学科ゼミナール授業活動（総合学修）に関する教育実践報告である。平成17（2005）年「食育基本法」が制定されて以降、保育の現場でも「食育」の導入が本格的に行われていることに鑑み、平成21（2009）年度から報告者は「食育表現ゼミナール」を担当している。ゼミナール所属学生は「食育」を主題とした表現媒体の制作、すなわち子ども達に分かりやすく食の大切さを伝えることを目的としたカルタ・紙芝居・双六などを制作して発表してきた。特に平成25年度は、5月に学生が行った山口県山口市阿東徳佐地区のリンゴ園訪問や同地区で7月28日に発生した豪雨災害後に行った電話取材の経験を生かして、後期の大型紙芝居制作・発表を行うことができた。本活動を通じて「領域『言葉』を土台に『食育』に関する保育学生の資質向上を図る」目的は概ね達成できたと考えられる。今後も、「食育」を主題とした表現活動を主体にした地域交流・実践活動を実践できるゼミナール活動の展開を目標としたい。

キーワード：食育基本法、紙芝居、下関ぶちうま食育プラン、山口市阿東、リンゴ、豪雨災害、アクティブ・ラーニング、領域「言葉」

Summary:

This paper is an educational action-training report on teaching activities (integrated studies) conducted during fiscal year 2013. Ever since the enactment

of the “*Basic Law of Shokuiku*” in 2005, “*Shokuiku*” or food and nutrition education has been introduced in Japan on a full scale even in the field of *Early Childhood Education and Care*. In view of this, I have been placed in charge of the “*Shokuiku Expressive Seminar*” since fiscal year 2009. Composed mainly of students who wish to make a career out of *Early Childhood Education and Care*, presentations have been made of our production of *Karuta* (traditional Japanese playing cards), pictures story shows and *Sugoroku*, a Japanese variety of the game of Parcheesi, all for the purpose of conveying the concept of “*shokuiku*” more understandably to children. As a special notation for fiscal year 2013, I would like to state that we were able to complete our production and presentation of “large scale picture story shows” in the latter half of the fiscal year by making use of experience gained by our students who visited the apple farm in the Atou Tokusa district in Yamaguchi City of Yamaguchi Prefecture in May, and who conducted telephone interviews in the same area after the torrential rain disaster of July 28. I believe that the goal of improving the quality of our *Early Childhood Education and Care* students by placing the groundwork on regional “language” , has by and large been achieved through the said period of seminar activities. For the future, I would like to continue to set my goals on holding seminar activities, which emphasize expressive action with a theme of “*shokuiku*” that are capable of carrying out regional exchange.

Keyword: Basic Law of *Shokuiku*, picture-story shows, Shimonoseki “Just Tasty”
Shokuiku Plan, Atou town, apple, torrential rain disaster,
active learning, regional language.

1 はじめに — 「食育表現ゼミナール」活動と本稿の目的—

平成 17 (2005) 年 6 月「食育基本法」(法律第 63 号) が定められてから約 10 年間に経過した。同基本法では「国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性をはぐくむ」(第 1 条) ことを目的として、国・都道府県・市町村・関係諸団体などを中心に様々な「食育」活動が展開されている。周知の通り、下関市でも平成 20 (2008) 年度から第一次、平成 25 (2013) 年度から第二次の各 5 年間に計画期間とした食育推進計画「下関ぶちうま食育プラン」が策定され「学校・幼稚園・保育所等における推進」が行われている^(注1)。

保育現場においても、平成21(2009)年4月施行「保育所保育指針」第5章「健康及び安全」における「3 食育の推進」の新設および「幼稚園教育要領」第2章「健康」における「食育」が位置付けられ、平成26(2014)年4月に告示された「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」でも第1章に「食育の推進」が記され、現場における食育への留意が明記されている。

以上の状況をふまえ、平成21年度から筆者は、本学保育学科において『『食育』に関する『言語表現』活動実践を通じた保育学科学生の資質向上』という目標のもと選択希望学生を主体とした「食育表現ゼミナール」(1・2年生合同総合学習、以下「本ゼミ」と略記)を担当してきた。「食育」や「栄養」に関する専門知識・指導については、適宜、本学の栄養健康学科教員に指導を受けながら活動を進め、1. 言語表現媒体・教材と「食育」についての学修、2. 実践的な言語表現能力の向上・実践、以上2つを主眼に授業を展開している。過去における本ゼミの活動概要は、平成21年度：「山口食育カルタ」制作・実践^(注2)、平成22(2010)年度・平成23(2011)年度後期：大型紙芝居制作・発表^(注3)、平成23年度前期「食育双六」制作・被災地への送付^(注4)、平成24(2012)・25(2013)年度：地域の食材研究と大型紙芝居制作・発表^(注5)、平成26(2014)年度：「食育双六」制作発表、平成27年度(2015)：「食育」の総合研究と大型紙芝居制作・発表、以上である。本稿では以下、平成25年度における本ゼミの活動報告を行う。

2 実践報告

本章では最初に保育学科ゼミナール及び本ゼミにおける通年における活動概要を述べた後(2・1)、平成25年度前期(2・2)、平成25年度後期(2・3)の活動報告を行う。

2・1 実践概要

保育学科ゼミナール(以下「ゼミ」と略記)は、学生が所属ゼミを選ぶ希望選択制であり、学生が希望する研究対象を主体として授業を展開している^(注2)。通年(前期15回、後期15回)で行い、1・2年生合同の活動が前提であること、後期12月の「創作発表会」にて下関市内の施設を借りて地域住民に対して各ゼミの研究発表を行うこと、以上が特徴として挙げられる。各ゼミの所属は各学生の希望に基づいているためゼミ毎、年度毎に所属学生数の差があるが、1年間の流れは次の通りである。

- ・前期：所属ゼミナールの希望調査・所属先決定、ゼミ毎に具体的な活動を決定して活動開始
- ・後期：ゼミ毎の活動推進、12月「創作発表会」における研究成果発表、次年度への反省

上記の通り活動内容は、各ゼミに任されているため、筆者が担当するゼミでも所属学生と共

に年度毎に決定している。次に報告者の指導担当ゼミ「食育表現ゼミナール」（以下「本ゼミ」と記す）について概要を述べる。

平成25年度の所属学生は、2年生7名であり、内5名が1年次からの継続所属者で、内2名が2年次になってからの新規所属者である。

平成25年度における本ゼミの活動概要は、

- 前期（4月～8月）：学生が主体となった地域の食材・食育の研究調査
7月「みて、つくって、たのしんで」作品展と工作体験^(注6)、会場内ポスター発表
- 後期（9月～2月）：前期の研究知見を基にした表現媒体の制作・発表（大型紙芝居ほか）
以上を柱として通年授業を行った。

後期の表現媒体は、所属学生の希望により決定するため、紙芝居制作・発表に携わったのは

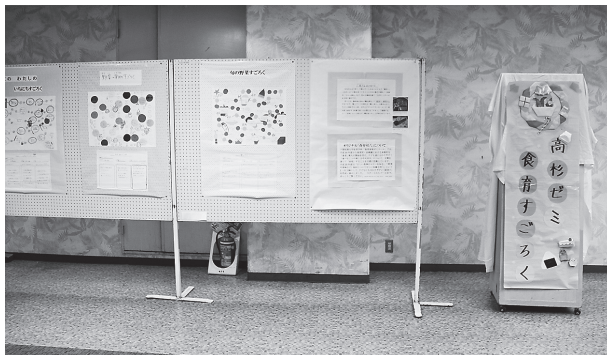


写真1 平成25年度創作発表会
「食育すごろく」ポスター発表

上記の内、平成25年度は、2年生2名であった。それ以外の2年生5名は、各自が主題を設定し（ぼくのわたしのいちにち・山口の食べ物・野菜と果物・季節の野菜・旬の野菜）、その主題に基づいて制作した「食育すごろく」のポスター発表を行った（写真1）。

また、後期の大型紙芝居発表は平成25年度中、2回行った。

- 12月「第26回下関短期大学保育学科 創作発表会」
（開催場所：シーモールホール、対象者：一般来場者親子約90名）
- 2月末 栄養健康学科「食育ゼミナール」主催：親子料理教室「おにぎり作り」^(注7)
（開催場所：下関短期大学附属第二幼稚園 対象者：年長組親子約50名）

次に、前期・後期に分けて本ゼミの活動報告を行う。

2・2 平成25年度前期活動報告

平成25年度前期、本ゼミに所属した合計7名（2年生7名）は、ゼミ毎の授業開始後、初回・第2回授業時に下関市が発行した「第1次下関ぶちうま食育プラン」「第2次下関ぶちうま食育プラン」^(注1)を概観した。1年次からの継続所属者が半数以上を占めたため（7名中5名）、前年度からの継続・関連事項として、第2次プランにおける「計画策定の趣旨」および「ライフステージに応じた取組のポイント」を中心に学んだ。

下関市における食育の取組についての学修と並行して、第2回授業の後半では、具体的な研

究活動の主題を決定するためにディスカッションを行った。その結果、研究主題は「山口県の農産物」に関する調査研究に決定した。その理由は、「地産地消の実態について知りたい」「(北九州市から通学しているので)下関市や山口県の農林水産物をよく知らない」「(山口県に住んでいるが)地元の食材について、もっと知りたい」という意見に全員が賛同したためである。このディスカッションに基づき、前期は各自が興味を持った山口県の農産物の調査研究・発表を行った(2・2・1)。

2・2・1 平成25年度前期「山口県の農産物」の調査研究・発表について

平成25年度前期の研究主題となった「山口県の農産物」に対し、学生の話し合いの結果、グループ研究ではなく、各自が興味を持った農林水産物をひとり1品ずつ選んで個別に調査研究をすすめることとした。主題の選択は、「第1次下関ぶちうま食育プラン」に掲載されている資料「しものせき農水物産マップ」「しものせき旬の農水物産カレンダー」または「やまぐちの農林水産物需要拡大協議会」が運営するホームページ「まるごと!やまぐちnet」などを参考にした。その結果、研究対象は、野菜を調査する学生が4名(はなっこりー、垢田トマト、安岡ネギ、長門ゆずきち)、果物の調査者が3名(下関市内で栽培されるイチゴ、豊田梨、阿東のりんご)となった。

前期第3回授業以降、各自が決めた研究対象の農産物に対して調査活動を行った。調査方法は、各都道府県の代表的な品種について各地のJA等が編集しているインターネットホームページ、政府・地方自治体による刊行物や白書等を使い各自が調べた。

当初は各々が関心を持った事項について調査を行ったが、第5回授業の全体ミーティングで経過報告を行った時、学生は各自の調査観点が異なることに気付いた。例えば、ある報告は栽培方法が中心だが、他の者は栄養成分の調査報告を重視しているといった具合であった。この状況に対して本ゼミ継続所属者は、平成24年度前期、全国を8地区(北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州)に分けた「ブランド米」の調査研究を体験し、「予め項目を共通で決めると調べやすく発表するときも分かりやすい」ということを学んでいたため^(注5)、共通の調査事項を予め決定しておくこととした。ミーティング時には、学生から調査項目候補として10項目が挙げられた〔調査対象の説明(特徴など)、歴史、品種(分類・由来など)、栽培方法、収穫時期、栄養成分、収穫量、味の特徴、加工、流通範囲〕。話し合いの結果、①(主題とした農産物の)説明、②歴史(栽培の歴史、名前の由来など)、③品種、④収穫時期、⑤栄養、⑥感想、以上6つを共通調査事項とした。

その他に統一した事項は、発表用ポスター発表をする際の提出原稿の体裁である。体裁を予め決定した理由は、平成24年度と同様、7月13日(土)～15日(月)「第5回 みて、つくって、楽しんで」作品展と工作体験(於：シーモール下関専門店街2階ピアモール、対象者：来場不

特定多数者)にてポスター発表を行うことを前提に研究調査を進めたこと、及び本ゼミ継続所属者から「調査項目だけでなく、用紙の大きさ、文字の大きさなどの書式もそろえた方がよい」という過去のポスター発表での経験に基づく意見が出たためである。最初に問題となったのは、発表内容の記し方である。学生の協議では、「温かみのある手書きのポスター発表が良い」「情報を沢山盛り込めるのでパソコンを使った作成書類を大判用紙に貼り付けて展示したい」という2つの意見に分かれた。そこで多数決の結果、展示のための提出書類はパソコン作成と決定した。また、開催初日前の授業日(7月10日)までに担当教員にA4版4枚の紙面とデータ提出を行い、教員が誤字脱字等を確認の上、B4版に拡大印刷した書類を大判用紙(B1:103×72.8cm)に貼り、展示することを学生と協議の上、決定した。同時に、提出書類の書式も細かく決定した(題名・氏名等の記載位置・文字数と行数・文体は常体・フォント・文字ポイント数など)。

調査・データ作成は適宜、担当教員が相談に応じつつ各自で行った。書類作成時に担当教員が特に配慮したのは、著作権の保護である。参考文献・URLなど出典を明記すること、また場合により、写真掲載・展示許可をホームページ作成者や写真撮影者から得る必要があることを説明した。

学生の書類提出日は自主的に7月10日(水)を締め切りと決定したが、7名中2名が間に合わず、結果的には5名分のポスター展示となった(写真2)。会場でのポスター掲示は担当教員が行ったが、会期中、本ゼミ所属学生は全員、自分達の発表状況や会場全体の展示状況を観察した。

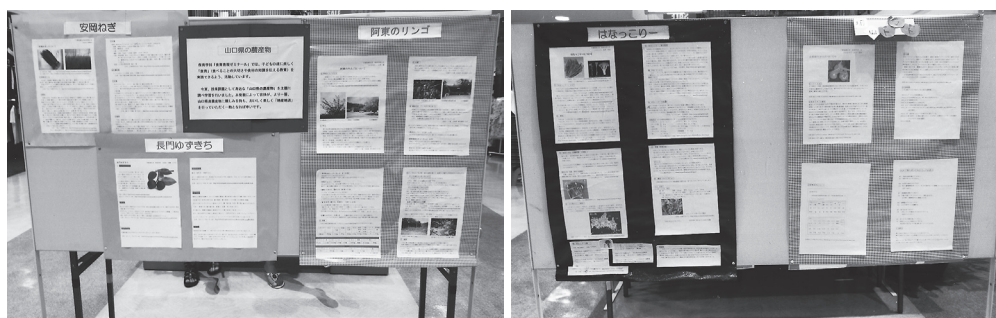


写真2「山口県の農産物」ポスター展示
(左「安岡ねぎ」「長門ゆずぎち」、右「阿東のリンゴ」「垢田トマト」「はなっこりー」)

本研究・発表活動終了後、すなわち7月24日、前期授業の締めくくりとして感想文の作成・提出を行った。学生の感想の観点は、「調査研究」「展示発表」に大別でき、以下の通りであった。末尾に人数の記載のない項目は、全て1名が記載した感想である。

【調査研究について】

- ・(調査対象が) 自分も好きな食材なので調べることができて良かった。
- ・(調査対象を) 一つに決めて調べることは意外と難しかった。
- ・「長門ゆずきち」を調査したが(今回は収穫時期と重ならず) 食べたことがないので今後試したい。
- ・「阿東のりんご」を小さい頃から食べてきたが、知らないことが多く恥ずかしくなった。
また、地元の農家にインタビューでき、地元の名産品でも知らないことが多いと感じた。
同時に生産場所を直接拝見でき、「もっと知りたい、調べたい」という気持ちが湧いてきた。
- ・「安岡ネギ」をただ食べている時には分からなかったが、同じ下関の特産品「ふく」(河豚)に合うような食感・香りの良さなどにも特徴があり、市民にとっても誇れる特産品だと分かった。

【展示発表について】

- ・去年の経験を生かして今回、形式を細かく統一していたことで見やすく統一感があった(3名)。
- ・このポスター発表を通じ、多くの市民に地元の農産物や特産品を勧めて理解して頂きたい(3名)。
- ・提出が間に合わず申し訳なかった。調べていたにも関わらず展示できず後悔している(2名)。
- ・調べてきた事が発表でき達成感があった。
- ・今後、保育現場でも掲示物を作成することがあると思うのでこの経験を生かしたい。

また、展示期間中に一般来場者(希望者のみ・記述式)に今回の企画(作品展と工作体験)全体の展示活動に対するアンケート調査を行ったところ3日間で合計81人にご回答頂いた。その中で、自由記述項目「意見、感想、はげましの言葉などありましたら、おねがいします」という欄において本展示発表に対し1名から「下関の食物の話、トマト、はなっこりー、ねぎ等、地域の野菜について良く調べており参考になりました」(下関在住、7歳女子を同伴した保護者)という感想を頂いた。

このアンケートの感想記述については、学生にも7月24日前期の最終授業時に伝えた。アンケートの記述は任意であり、展示会場には他にも5つのコーナーがあったため(壁面構成、手作りおもちゃ、型染め・工作物、ポスター発表「子どもの保健」、展示「たべものきかんしゃ」)、本展示の感想記述は1名のみであった。だが、学生も会場に足を運び、熱心に展示をご覧いただく来場者の様子に接することによって、発表に対する達成感を味わったことが上記感想やミーティング時の様子から窺えた。このように学生は、前期活動の調査研究・展示発表を

通じて、各自が課題点・達成点を実践的に学ぶことができた。

2・2・2 平成25年度前期活動小括

平成25年度前期活動を通じて得た学修成果をまとめると次の4つが挙げられる。

- ①〈全体活動〉調査研究・展示発表方法、双方について実践的な体験学修を行うことができた
- ②〈調査研究〉「地産地消」への関心を高め、地元の農産物・特産品への知識を深めることができた
- ③〈発表活動〉「ポスター発表」を行うことによって自分自身の知識を深めるだけでなく、地元の方々に対して調査成果を発表し情報を共有することの大切さを学んだ
- ④〈発表表現〉「ポスター発表」を通じて調査手順だけでなく、提出期限を守ることの重要性、調査結果に対して「分かりやすい表現・形式」を工夫することの重要性を学ぶことができた

このように前期活動を通じて学生達は、調査研究活動（調査研究・実践発表）に対して学修成果が得ることができた。その反面、書類提出状況が示すように（2・2・1）、取り組み・成果報告の質や量にバラツキがあったことに注目したい（未提出者：2名、用紙定数半数の2枚提出者：2名、既定の4枚提出者：3名）。課題未提出学生2名は、友人の研究発表のみ掲示されている状況を目の当たりにして自主的に反省した様子であり（2・2・1【展示発表について】）、社会人としての基礎的なマナー、即ち成果を時間厳守で報告・提出することの重要性を学んだ。

教員の側からいえば、アクティブ・ラーニングのひとつである調査研究活動（ゼミナール活動）は、学生の自主性を重んじる分、興味関心・成果に個人差が出てしまうという結果を得た。同時に、調査研究の成果を公的に発表することは、①社会に向けた情報発信（社会貢献）、②学生の具体的な目標として機能すること、③学生にとって自分自身を客観視でき成長につながる機会となること、以上3つが分かった。

2・2・3 ポスター発表「阿東のりんごについて」内容紹介

平成25年度前期、本ゼミ所属学生の内、5名が学外施設においてポスター発表を行ったが（2・2・1）、その内1名（山本楓作成）の発表は、後期に制作・発表した大型紙芝居の基となったため、紙芝居に直接関係する発表項目（④栽培方法、⑤栄養の2項目を除いた6項目）を抜粋して紹介する（図1）。

下関短期大学保育学科 2年
学術番号1.2.2.4.0 山本 楓

阿東のりんごについて

① 阿東のりんごとは



・阿東のりんごとは、山口県山口市阿東で作られているりんごのことである。また、その中で現在、最も収穫量が多いりんごは、「ふじ」という品種である。
(「友清りんご園」友清達一郎氏談話による)
・「ふじ」は、1962年に品種登録されたりんごの品種で、デリシャスと国光の2種類のりんごを交配したものである。(出典:「ふじ(りんご)」ウィキペディア: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%85%94%E3%82%A4%E3%82%A9>)

友清りんご園のりんご「ふじ」(山本楓撮影)
(以下、写真は全て平成25年6月6日に撮影)

② 歴史



〈左〉山口市阿東徳生の「友清りんご園」内にある「徳佐りんご記念樹」(山本楓撮影)

第二次世界大戦終戦後まで阿東ではりんごを栽培していなかった。終戦後、友清達一郎さんの祖父友清徳勇さんが韓国の蔚山(ウルサン)から日本に帰国して、徳勇さんは、韓国の蔚山(ウルサン)でりんごを栽培していた。蔚山に戻った祖父は日本でもう一度りんごを作りたいと思った。そこで、りんごの栽培術だった長野県の飯田市の徳木重、気象データと同一場所を山口県内で探した。その結果、旧阿東町が一帯した、昭和21年(1946)にゴールデンシャイスという品種のりんごを植えた(写真右)。初の収穫は4年後の昭和25年(1960)だった。その後、現在の庄のように阿東りんごでも多くの園がりんごを栽培するようになった。

③ 品種



阿東で現在栽培されている最も多いりんごの品種は、「ふじ」である。全体の約6割を占めている。その他の4割は「つがる」「ジョナゴールド」「王林」「アカネ」が占めている。ちなみに、阿東で「ふじ」の収穫量が上がったのは、約40年前くらいである。

(「友清りんご園」友清達一郎氏談話による)
友清りんご園の花 (山本楓撮影)

④ リンゴのひとくちくちメモ

リンゴの園りのタベタについて

リンゴの回りタベタしたものについていることがある。これは、果実と似ているが、果実と似ていない。果実と似ていないが、果実と似ている方が多い。あまり大差はないように見えるが、このタベタが付いている方が味は良い。タベタが付いているりんごは、「つがる」「ジョナゴールド」「ふじ」の3種類である。リンゴの皮は食べなくてもいいのか



リンゴの皮は食べても大丈夫である。逆に、皮と果肉の間に多くの栄養が含まれているので食べる方がよい。上記でも挙げたがりんごの皮に付いているタベタを口に入れてもいい。また、農業を心配する人も多いと思う。しかし、農業には様々な病気がある。例えば、「収穫の一か月前には使用しない」、「年に一度しか使用しない」、「前半のみ使用する」がある。従って、農業を心配することはない。

(写真)友清りんご園の肥料置場 (山本楓撮影)

⑤ 「友清りんご園」からのミニ知識

- ・阿東は下関市より開花が遅い(遅いのは早い) (例)阿東4月28日、下関4月19日
- ・地球温暖化の影響は現在これといっていない。しかし収穫時期が全体的に早くなった(他の作業も同様)
- ・中国は多くのりんごを栽培している(中国→アメリカ→日本)の順である。
- ・中国は高湿多湿を一時調整しても、りんご畑は緑く。
- ・美味いりんごの見分け方は下の部分が黄色(黄色いもの)が良い(赤色が濃く)から、形が良いというのはいま参考にならない
- ・友清りんご園では平成15年(2003)から、ブルーベリーも栽培している。ブルーベリーは、「アントシアニン」を多く含んでおり、健康にも良いとされている。



〈左〉友清りんご園の様々な種類のブルーベリー



〈右〉植木鉢のブルーベリー (山本楓撮影)

★感想文

私が今回「阿東(徳生)のりんご」を調べて分かったのは、地元の名産品であっても知らないことが多いという事だった。阿東で最も多くのりんごの品種について、阿東で一番先にりんごを栽培したりんご園の事など、小さい頃から食べてきたりんごなのに知らなかったのがとても恥ずかしくなった。しかし、今回の調べ学習や実践に「友清りんご園」に行って生産者の方に質問し、生産場所を間近で見学することで一つずつ知識が積み、「もった知りた、調べたい」という気持ちでどんどん調べてきた。今回の調査・発表を通じて、多くの人が私のようにりんごに興味をもち、食に対しての関心がもっと広がることを期待している。

図1 ポスター発表：山本楓作成「阿東のりんごについて」(概要抜粋)

平成25年7月のポスター発表では、担当学生が山口市阿東出身ということに因み「阿東のりんご」という題名で発表を行ったが、同地域の徳佐りんご組合・徳佐りんご観光協会では「山口県山口市阿東徳佐地区で栽培された徳佐りんご」、即ち「徳佐りんご」という名で広報・流通をしておられる。平成25年に学生が取材を行った「友清りんご園」も徳佐りんご組合の構成園として参加しておられるが、「徳佐りんご」のインターネットのホームページは、平成26年（2014）に開設されたため、学生がポスター発表を行った当時は閲覧できない状態であったことを付記しておく。

2・3 食育大型紙芝居「りんごの国のおひめさま」制作と発表

平成25年度後期（9月～2月）、本ゼミ所属7名中、学生2名（2年生2名）は、前期に得た研究知見（阿東のりんご）を基にリンゴを主題とした表現媒体の制作・発表（大型紙芝居、上演時間約15分間）を行った。以下、制作過程と目的（2・3・1）、あらすじ（2・3・2）の順で報告する。

2・3・1 制作過程と目的について

紙芝居の制作は、昨年度と同様、①制作および発表目的・ねらい（来場者・子ども達に何を伝えたいか）の決定、②あらすじの決定・登場人物等の設定、③上演における表現方法の決定、④台本作成と紙芝居・ペープサート制作、という順で行った。①制作発表のねらいについては「地元の農産物、阿東のリンゴに興味を持つ」「自然環境の中でリンゴを育てることの大変さを学ぶ」「友清りんご園で教えて頂いた知識を子ども達に分かりやすく伝え、リンゴに関する知識を深める」以上3つを主眼とした。紙芝居の舞台である阿東は山口市であるが、上記3つの事項を上演地の「第2次下関ぶちうま食育プラン」と照らし合わせると「心の財産づくり」（あらゆる「命」に感謝する）、「故郷の財産づくり」（自然環境や地元産業を理解し、故郷に誇りと愛を抱く）、2つの事項に該当しよう。

なお、「自然環境をふまえてリンゴを育てることの大変さを学ぶ」というねらいは、同年7月28日に発生した豪雨災害（鳥根県と山口県の大雨）に基づく。平成25年7月28日、1日の降水量は、徳佐で324ミリ（同地区の7月の平均降水量314ミリ）、山口市阿東の住宅被害は全壊10件・大規模半壊3件・半壊42件・床上浸水45件・床下浸水166件という状況で、山口県の農林業関係被害は水稻被害面積576ha、野菜・果実など被害面積が15haにのぼった^(注8)。阿東地区のリンゴ園については「徳佐りんご組合では約35haにりんごの木約1万5000本を栽培。今回の豪雨による被害は全体の約1割程度」と報道されている^(注9)。

この豪雨災害は前期授業終了後におきたため、後期授業開始後の9月、学生が取材に伺った友清達一郎氏にお見舞いを兼ねて連絡をとったところ「友清りんご園」に大きな被害はなかつ

たことを確認できた。更に風水害等の自然災害への対策について後日、電話で友清氏に伺うと「今回の集中豪雨は、突然のことで、対策が非常に困難であった。例年、最も心配されるのは秋の台風だが、早めの収穫を行うか、枝を支える支柱を立てておくといった対処しかない」という現状を学生に教えて下さった。この出来事を通じて、自然災害によって長年栽培しているリンゴや農作物が僅か1日で大きな被害に遭うことだけでなく、事前対策は困難であるという実態についても学んだ。

「②あらすじの決定・登場人物等の設定」における原案作成は、前期「阿東のりんご」研究発表を行った2年生が担当し、担当教員を交えた話し合い・添削をへて完成した。当初は、前期に行った「友清りんご園」への現地取材・ポスター発表を土台として、②の登場人物等の設定・あらすじの決定を行う予定であったが、7月豪雨災害のことも考慮すべきであるという結論に達した。登場人物は、平成24年の発表では、鑑賞者となる子ども達の親近感が湧くように下関市在住の5歳女兒としたが、平成25年度は、主人公の5歳のリンゴの妖精が、阿東のりんご園に住む5歳男児を訪ねる設定とした。

「③上演の表現方法」は、大型紙芝居を主体とし、1) 紙芝居の絵だけで物語を展開する、2) 紙芝居を背景として使用し学生が前面に出て演技する、以上2つの表現形式を効果的に使用しながら展開することとした。前年度との相違点は2)の「学生が演技する」という点である。平成24年度は、ペープサートに登場人物の絵を描いた物を使って上演したが、大きな動作・表情がつけにくいという欠点があった。そこで、平成22・23年度と同様、紙芝居を背景として学生が演じる寸劇風の場면을織り交ぜながら紙芝居を進行することを試みた。

上演時における本ゼミ所属学生2名の役割分担は、登場人物2名（主人公：リンゴの妖精「リンちゃん」1名、りんご農園の男子「ひろくん」1名）とし、他にもナレーター1名、音響・台風役（賛助）1名の2名が必要だったため、他のゼミナール所属学生に賛助出演を依頼し合計4名で上演を行った。

2・3・2 大型紙芝居「りんごの国のおひめさま」あらすじについて

ナレーション（ペープサート使用）、紙芝居を背景とした寸劇を行いながら8場面、4枚の模造紙（78.8×109.1cm）に絵を描き、物語を展開した。各場面のあらすじを以下に記す。

第1場面（導入：本紙芝居の主題紹介）

導入では紙芝居をみせない（ナレーターのみスポット照明）。最初にナレーター（賛助学生、2年生1名、写真4）が「リンゴ」の黒いシルエットが描いてあるペープサートを出し、これが何であるか尋ねる（写真3左：リンゴのペープサート表面）。子ども達が「リンゴ」と答えた後、裏面に描かれた赤いリンゴを見せて語りかけ（写真3右）、リンゴの収穫期が秋か

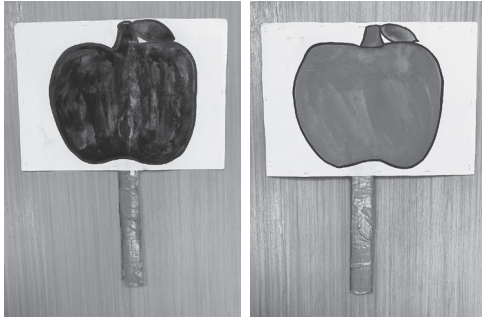


写真3 ペープサート
(表：リンゴシルエット、裏：赤いリンゴ)



写真4 リンゴのペープサートを
掲げて語るナレーター

ら冬であり、この物語は皆が大好きなリンゴが取れ始める秋の出来事であることを伝える（写真4）。その後、出演者全員による「はじまり、はじまり～」という声で、紙芝居を始める。

第2場面（紙芝居1枚目、写真5：フルーツ・ワールドのリンゴの国）

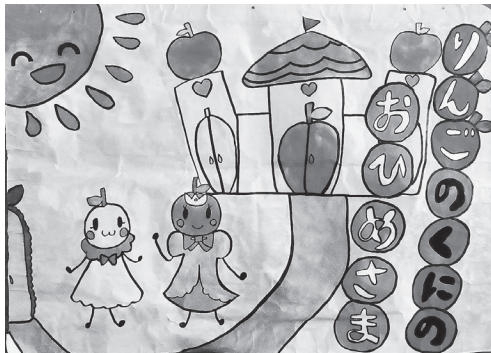


写真5 紙芝居1枚目（第2場面「りんごの国」）

紙芝居1枚目を提示（写真5）。ここは果物の妖精が沢山住んでいる「フルーツ・ワールド」内の「リンゴの国」であることを紹介する。主人公、5歳の妖精「リンちゃん」と友達の妖精「みどりちゃん」の会話を通じて、フルーツ・ワールドでは、妖精が5歳になったら人間界に行き、自分が担当する果物について勉強し、帰る時には人間からその果物をもって帰らなければ妖精のお姫様にならないことを伝える。

第3場面（紙芝居2枚目・写真6-1～-2：阿東に到着したリンちゃんりんご園のひろ君）

フルーツ・ワールドから人間界の山口市阿東に派遣された妖精のリンちゃんがりんご園に到着する（写真6-1）。農園に沢山のリンゴの実がなっている様子を見て、思わず食べようとした時（効果音と同時に紙芝居左半分をめくる、写真6-2）、農園経営者の息子である5歳のひろ君が登場し「おじいちゃんの大事なリンゴの木だから食べてはいけない」と注意する。リンちゃんは、ひろ君に阿東に来た理由を話して仲良くなり、リンちゃんの勉強の手伝いをすることを告げる。



写真 6-1 紙芝居 2 枚目
(りんご園に到着した妖精)



写真 6-2 紙芝居 2 枚目
(写真 6-1 の左半分を転換、ひろ君登場)

第 4 場面 (紙芝居 3 枚目・写真 7-1 ~ -3 : 3 種類のリンゴ)

リンちゃんは、最初に「ふじ」「王林」「ジョナゴールド」の 3 種類について学ぶ (写真 7-1)。ひろ君は、農園で栽培している 3 種類の木について『「ふじ」は甘くて歯ざわりがシャ

キシャキ、『王林』は皮が緑色で長持ちする、『ジョナゴールド』はアメリカ生まれで実が硬くて美味しいんだよ」と該当する木を示しながら、リンちゃんに説明する (写真 7-1)。それぞれのリンゴの説明時に、紙芝居の下部にリンゴの種類が記してある紙を 1 枚ずつめくりながら順に伝える (写真 7-2、7-3)。

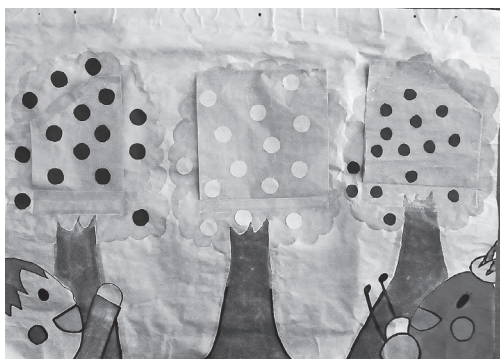


写真 7-1 紙芝居 3 枚目 (3 種類のリンゴの木)

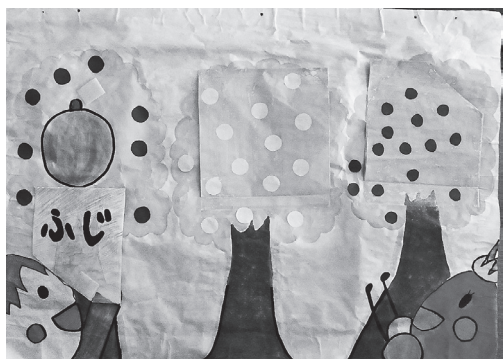


写真 7-2 第 4 場面
(紙芝居 3 枚目、左「ふじ」をめくった状態)



写真 7-3 第 4 場面
(紙芝居 3 枚目、3 種ともめくった状態)

この3つの品種の内、日本で最も多く作られている種類を来場者にもクイズ形式で問いかけ、挙手して答えてもらうよう参加を呼びかける。そして日本全体だけでなく、阿東でも一番多く作られているのは「ふじ」であること、更に中国やアメリカといった海外でも「ふじ」が作られていることを来場者とリンちゃんは学ぶ。

第5場面（紙芝居3枚目・写真7-3：3種類のリンゴと食べごろ）

リンちゃんは、農園のリンゴを1つ貰って食べようとする。

ひろ君から貰って手に取ると、周りがベタベタしていることに気付く。リンちゃんが不思議に思って質問すると、「これは『完熟』して果物が完全にうれて、食べ頃になると自分で油を出して知らせてくれているんだ」とひろ君が説明する。「完熟」という言葉を解説する時、ナレーターが「完熟」と記したペープサートを出して示す（写真8-1、8-2）。

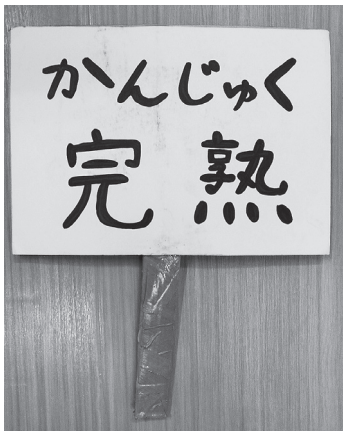


写真8-1 ペープサート「完熟」

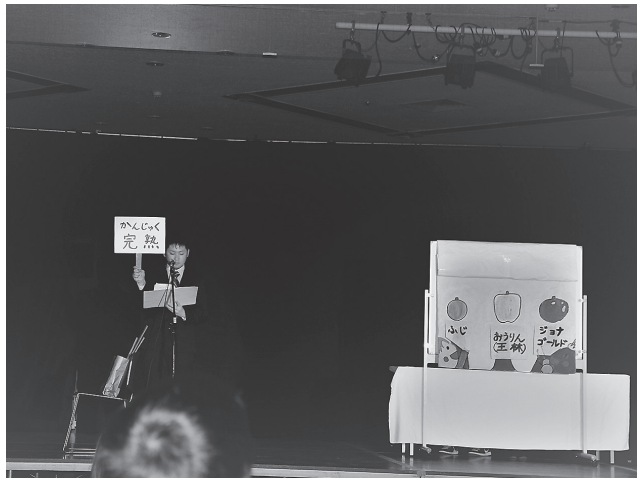


写真8-2 第5場面上演風景
（紙芝居3枚目、「完熟」という言葉の説明）

リンちゃんが、「ベタベタをみつけたら美味しいリンゴが食べられるのね」と喜ぶと、ひろ君は「完熟しても油を出さないリンゴがある。例えば王林にはあてはまらない」と伝える。そこでリンちゃんが全部にあてはまる美味しいリンゴの見分け方はないか聞くと、ひろ君は「りんごの下の部分をみることだ」と言う。「リンゴのお尻の部分が黄色に近い方が美味しい」ことをナレーターがペープサートで示しながら伝える（写真9-1、9-2）。それまでリンゴの周りしか注目したことがなかったリンちゃんは「リンゴのお尻」もみた方が良いことに驚く。すると、強い風が吹いてくる。

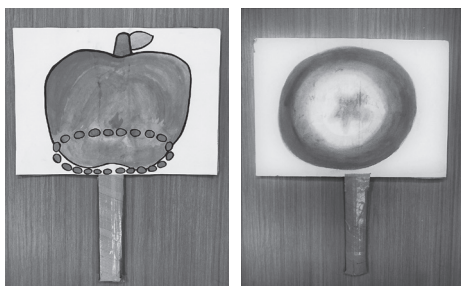


写真 9-1 「完熟したリンゴ」ペーパーサートの表と裏（左：「リンゴのお尻」の図示、右：黄色になった「リンゴお尻」）



写真 9-2 第5場面上演風景（美味しいリンゴの見分け方）

第6場面（紙芝居2枚目・写真6-2：台風の到来）

紙芝居を2枚目に戻す（写真6-2、リンちゃんとリンゴ園のひろ君）。風が次第に強くなってきたので、リンちゃんが不思議がると、ひろ君は台風が近づいていることを伝える。台風は、一緒に雨を連れて来てくれるから嬉しい時もあるが、強い風でリンゴの木が折れたり、実が吹き飛ばされたりすると説明する。リンちゃんが「何か方法はないの」と尋ねるが、「台風が近づいてくるのはどうしようもない」とひろ君は答える。リンちゃんは、リンゴを守りたいと思い、暫く考えた結果「自分は妖精だから、特別な呪文が使える」と気づく。ここで、紙芝居に描かれた服装と同じ服を着たリンちゃん・ひろ君の声の担当学生（2名）が、紙芝居の前に立ち、会場の子ども達に「リンゴが強くなる呪文を一緒に唱えてほしい」と呼び掛ける（写真10-1）。そして、来場者と一緒に呪文を唱えた直後に、台風が通り過ぎる。なお、台風は風の音響を会場に流すことと賛助出演の学生（1年生1名）が青と白、2色のポンポン（青と白のビニール紐で作った房）を大きく振り回しながら紙芝居の前を通り過ぎることによって表現した（写真10-2）。



写真 10-1 第6場面上演風景（紙芝居の傍で会場に呼びかける学生達）



写真 10-2 第6場面（台風が通り過ぎる様子）

第7場面（紙芝居2枚目・写真6-2：リンちゃんとの別れ）



写真11 ペープサート
「3種のリンゴが入った籠」

台風通過後、リンゴ園を見回すとリンゴは1つも落ちておらず、木の枝も全く折れていなかった。ひろ君は「リンちゃん与会場のみんなのお陰でリンゴが強くなったんだね！」と呪文を一緒に唱えてくれたお礼を言う。

リンちゃんは、帰らねばならない時間になったと告げ、ひろ君にリンゴについて色々教えてくれた感謝の気持ちを伝える。ひろ君は、リンゴ園を台風から守ってくれたお礼にこの農園で収穫し、自分が「リンゴのお尻」をみながら選んだ「ふじ・王林・ジョナゴールド」を入れた籠を贈り（写真11）、リンちゃんは妖精の世界へ旅立つ。暗転と同時にリンちゃん・ひろ君の声の担当学生（2名）は、紙芝居の背後に戻る。

第8場面（紙芝居4枚目・写真12：フルーツ・ワールドに戻った妖精たち、終演挨拶）

こうして、リンちゃんは阿東のリンゴを沢山持って、「フルーツ・ワールド」に帰ることができた。リンちゃんは同時期、青森に派遣された友達の妖精「みどりちゃん」に阿東の思い出話をする（写真12-1）。その頃、人間界のひろ君は、リンゴ園で果実に太陽がよくあたるように葉を取る母親のお手伝いをしていた（写真12-1右側）。母親は近頃、ひろ君が積極的にリンゴ園の手伝いをするようになったので、疑問に思い「何かあったの」と理由を尋ねるが、ひろ君は妖精のリンちゃんに会ったことには触れず「それは、ひ・み・つ」と答える。これで、この物語はおしまいであることをナレーターが告げる。

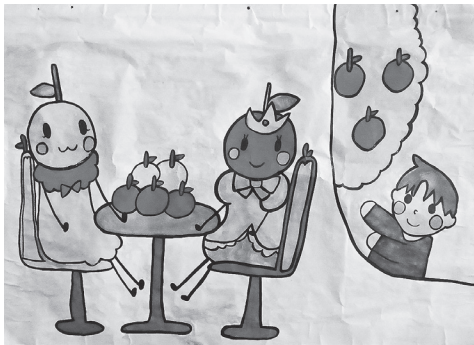


写真12-1 紙芝居4枚目
（フルーツ・ワールドの妖精達と人間界のひろ君）



写真12-2 終演挨拶
（紙芝居と出演学生4名）

締めくくりの挨拶として「みんなもリンゴを食べる時には、私たちのことを思い出してね」と出演学生（4名：ナレーター、リンちゃん、ひろ君、台風・音響担当者）が呼び掛ける。全員、紙芝居の前で整列して終わりの挨拶をして終演（写真12-2）。

2・3・3 食育紙芝居劇「りんごの国のおひめさま」制作・上演上の工夫点

制作における工夫点として最初に挙げられるのは、主人公・場所の設定である。

先述したが（2・3・1）、登場人物を5歳の妖精と地元山口県山口市阿東の5歳児の男児とすることによって、鑑賞する子ども達が物語を身近に感じられるようにした。物語の場所設定は、山口県内の阿東のりんご園と具体的に設定したことによって「地産地消」を伝えると同時に、研究事実・取材に基づく栽培の実態（品種・栽培状況など）を紹介できた。後者、栽培の実態に基づく紙芝居制作の重視は、平成24年度の学習体験（前期「ブランド米」研究・後期コメを主題とした大型紙芝居の制作）に基づく。

次に、あらすじ・台本を作成する時に配慮したのは、取材・事実に基づいた身近で分かりやすいリンゴに関する知識の紹介である。主な観点は、①取材に基づく身近な知識の紹介、②ペーパーサートを使った分かりやすい説明、③来場者・子ども達が参加できる場面を設定してリンゴに親しみをもちやすいようにすること、以上3点である。

1点目の身近な知識については、「友清りんご園」での取材時に得た知識を分かりやすく紹介することを心掛けた。直接的な情報提供としては、美味しいリンゴの見分け方（形や側面の色の良さではなく下部の地色が黄色に近い物が良い）、リンゴの周りに付いている「ベタベタ」は完熟の証、など身近に体験でき直ぐに役立つ情報を選び伝えることとした。また、間接的な情報提供としては、第3場面、ひろ君が「おじいちゃんの大事なリンゴの木だから」とリンちゃんに伝える場面がある。これは、「友清りんご園」で昭和21（1946）年、最初に植えられた「徳佐りんご記念樹」（ゴールドデリシャス）が大切に保存・手入れされている様子を学生が現地取材したことに基づく（図1）。生産農家は、農作物を大切に育て、手入れしている様子を伝えるために配慮・表現の工夫を行った。

2点目のペーパーサートを使った分かりやすい説明において、特に配慮したのは「美味しいリンゴの見分け方」を伝える場面である（2・3・1 第5場面）。今回の紙芝居では、3種のリンゴについて説明を行った上で、友清達一郎氏から教えて頂いた全てに当てはまる「美味しいリンゴの見分け方」を伝えようと試みたが、美味しいリンゴは単に「熟している」というより、程よく熟度が進んだ「完熟」の状態であることを友清氏から教えて頂いた。

当初は、「完熟」という言葉は漢字熟語で難しいため「よく熟れている」という表現に変えることも考えたが「完熟」という言葉の使用にこだわった。その理由は、「よく熟れている」という表現の場合、「よく」という言葉では、どの程度熟れているのかが分かりにくいと感じ

たためである。「未熟」でも「過熟」でもなく、美味しく食べるために最も良い状態であることを簡潔に伝えるためには、取材時に学生が伺った「完熟」という言葉が最適と考えた。但し、子ども達にとって、初めて聞く言葉であることが予想できたので、「完熟」という言葉を正確に伝えるためにペープサートと平易な言葉を使って説明することとした。ペープサートについては、「かんじゅく」と平仮名のみで書いた物を試作してみたが、「完熟」という漢字を書いた上に平仮名でルビをふる表記「完熟^{かんじゅく}」に決定した（写真8-1）。その理由は、一緒に鑑賞する保護者にとって、平仮名の「かんじゅく」だけでなく漢字が添えてある方が分かりやすいと考えたためである。なお、説明時の参考のため『広辞苑』（第5版、岩波書店、1998年）の「完熟」をみると、「果実または種子が十分大きくなり、内容も充実した状態になること」とあり、大きさも内容も充実した状態であること、「十分」「充実」という言葉を使って説明していることが分かった。但し「十分」「充実」と「完熟」の発音は重なる部分が少ないため、紙芝居の上演時には連想しにくいと判断した。以上を勘案して上演時は、「完熟^{かんじゅく}」と記したペープサートをナレーターが掲げながら「完全に果物がうれている、ということです」と同音の「かん」を冒頭に含んだ「完全」という言葉を使用した（写真8-2）。同時に、この説明に続けて「つまり、食べ頃の時期」という説明をナレーターが行い「大きさも内容も充実した状態」という意味が伝わるよう工夫した。

「完熟」という言葉の説明に続く（完熟した）「美味しいリンゴの見分け方」の説明、即ち「リンゴのお尻の色が黄色に近い方が美味しい」ことを伝える場面では、「リンゴのお尻」がどの部分にあたるのか、囲んで図示したペープサートを用意し（写真9-1）、裏面にはお尻からみた様子を描き、該当する部分を可視化することによって、鑑賞者が実際のリンゴでも試せるように工夫した（写真9-2）。

3点目の「来場者・子ども達が参加できる場面」については、平成24年度の「（紙芝居を）単に観るだけでなく、参加する場面を作って子ども達が飽きないように工夫した方が良い」という反省から導入した。具体的には、話の流れに沿ったクイズの実施と呪文と一緒に唱える場面を考えた。

前者のクイズは、先述したように（2・3・1 第1場面、第4場面）、2回行った。初回は第1場面、導入時のシルエットクイズであり、リンゴへの関心や今から始まる紙芝居への期待を高めるために行った。2回目のクイズは、第4場面における3種類のリンゴを説明する場面で導入した。「ふじ」「王林」「ジョナゴールド」3種類のリンゴの内、最も多く日本で作られているリンゴはどれだと思うか、来場者に1人1回、挙手してもらった。実際の上演時、どのリンゴに一番多く手が挙がるのか予想できないので、予め2通りの対応を考えておいた。来場者の挙手数が正解の「ふじ」が最多の場合は、ひろ君が「その通り」と答え、それ以外の場合はひろ君が「残念」と答えて「違うよ」といった否定の言葉を使用しないように配慮した。そし

て、いずれの場合でもリンちゃんが「みんな一緒に考えてくれて、ありがとう」と声を掛け、感謝の言葉を添えるようにした。

後者の呪文を唱える場面は、台風が到来する場面で導入した(2・3・2 第6場面)。台本を考えた際に学生は、7月の豪雨災害や友清達一郎氏への取材の経験を生かしたいと考えた。つまり、長い間、一生懸命育てているリンゴや農作物が自然災害によって一日で大きな被害を受けることだけでなく、決定的な対策はない現状についても伝えたいと考えた。

しかし、現実をそのまま伝えるだけでは、子ども達が夢や希望を持ちにくいのではないかと危惧した。そこで、紙芝居上の物語として「不思議力を持った妖精の力でリンゴが強くなる」ことや、来場者にも参加を呼び掛け「力を合わせることによって呪文の力が大きくなる」という設定を考えた。上演時には、最初に妖精が呪文を教え、1回目は一緒に練習、2回目に本番、と複数回唱えてもらう場面の経過を考えた。同時に、ナレーターが「台風がどんどん近づいてきました。みんなの呪文は間に合うかな？」と臨場感をもって来場者が呪文を唱えられるように声を掛けた。続く台風が去った場面ではリンゴが無事だったことを確認する会話を設け(2・3・2 第7場面)、リンちゃんが「すごいわね！」と皆で力を合わせて唱えた呪文の力に驚き、ひろ君が「皆のお陰でリンゴが強くなった」と感謝の言葉を伝え、協力した成果を実感できるよう工夫した。

その他、上演時に行った工夫として挙げられるのは、効果音を付けたことと服装である。

効果音は、平成24年度と同様、鉄琴を使った。具体的には場面の移行時、つまりリンちゃん人間界に移動する時(第2～第3場面、上昇の滑奏音)・妖精の世界へ帰る時(第7～第8場面の間、下降の滑奏音)、以上2回、グリッサンド奏法で異空間への移動を暗示した。

服装は、呪文と一緒に唱えることを会場の子供達に呼びかける時、学生が紙芝居の前に立つ場面があるために配慮が必要であった(2・3・2 第6場面)。第5場面まで紙芝居の中だけに登場していた2名が、呪文を唱える場面のみ紙芝居の前に立って物語が進行する。これは、子ども達の反応を直接見ながら演者が臨機応変に声掛けできるようにするためである。但し、演者2名は、絵の中のリンちゃん・ひろ君と出来るだけ同じデザイン・色の服装を着て、子ども達が違和感を持たないように心掛けた(写真10-1、10-2)。また、台風を表現する時にポンポンを動かす学生は、顔・服が見えない方が良いので、黒い長袖シャツ・トレーナーを着用し、黒子用の頭巾をかぶって演者が見えないように配慮した(写真10-2)。

2・3・4 食育紙芝居劇「りんごの国のおひめさま」初回上演後の感想・反省

実践概要で述べたように(2・1)、上演は2回行い、ほぼ台本通り約15分間で行った。第26回下関短期大学保育学科 創作発表会(於:シーモールホール、平成25年12月14日(土))と「親子おにぎり作り教室」(於:下関短期大学付属第二幼稚園(以下付属第二幼稚園と略記)、

平成26年2月26日(水)である。

第1回目の上演後の授業日である12月18日、出演学生(4名)は担当教員を交え、撮影したビデオを鑑賞して意見交換を行ったところ、以下の意見が得られた。

【学んだ点・評価できる点】

- ・前期にリンゴ園への直接取材を行ったので、実感をもって媒体を作り、上演ができた。
- ・台本・作画・上演、作る体験・上演する体験、双方ができ、充実していた。
- ・リハーサル時に紙芝居の位置、立つ位置を決定し印を付けていたので本番は迷わなかった。
- ・照明の重要性が分かった。暗転する際は、きちんと暗転しなければ(場面が変わったことが上手く伝わりにくく)効果が薄いことが分かった。
- ・子ども達に伝わるのか心配だったが、(クイズや呪文を唱える時)子どもがきちんと呼びかけに答えて参加してくれたので嬉しかった。
- ・創作発表会終了後、受付の前を通る時、見送った学生から「りんごが食べたい」と言った子どもがいたと聞き、本当に嬉しかった。子どもがリンゴに興味をもってくれたことが一番嬉しかった。

【改善が必要な点】

- ・紙芝居の完成が本番1週間前で、ギリギリになってしまった。制作者2名が2年生で実習・就職活動もあり、仕方のない面もあるが、もっと時間を有効に使い、早目に作業を行うべきだった。
- ・上演に向けた練習時間が足りなかった。間のあけ方を工夫し、心の余裕をもった語りかけが必要。
- ・紙芝居・ペープサートが小さく感じた。舞台・会場の広さに応じた大きさを考えるべき。
- ・全体的に台詞を言う声の大きさが個人で異なっていたので、音量のバランスが気になった。
- ・(ペープサートの)出し方、見せ方。少しでも観客側からみて斜めになっていると見えにくい。表を十分にみる時間を置いて裏返した方が良い。また、次に出す物が見えないよう配慮すべき。
- ・クイズを出す時、「次の3つの中から選んでね」など、先に選択肢の数を言う方が答えやすい。
- ・みんなで唱える呪文「あっぶる・あっぶる・ぶっぶるーん」の「ぶっぶるーん」が言い辛そうだった。実際に(知り合いの)2歳児さんにとって、最後の部分が難しかったと聞いたので、全員が一緒に言えるように変えるべき。
- ・呪文を唱える前に「みんな、立ってね」など、呼びかけをもっとすべきだった。
- ・子ども達がクイズに答えた時、呪文を言ってくれた後など、もっと反応するべき。リアクシ

ョンを大きくして適宜、言葉を掛けるべき。

- ・場面の雰囲気に応じた反応。驚く時は一緒に驚き、もっと楽しそうに言うなど雰囲気作りが大切。
- ・上演時前半は、紙芝居の裏に3人待機した状態（台詞を言う者が2名、台風の担当者1名）。狭いので、紙芝居裏のどの位置に立てば観客から見えにくいのか、事前確認すべきだった。
- ・声が小さく、聞き取りにくいところがあった。語尾まできちんと発音すべき。
- ・最後に退場する時の動きが適当だった。

これらの意見は、第2回目の上演に向けた改善事項に組み込むこととした。具体的には、台本の改善と反省に基づいた練習、双方を平成26年1月から行うこととした。

2・3・5 食育紙芝居劇「りんごの国のおひめさま」初回上演後の改善と第2回目上演

先述の通り（2・1）、初回はシーモールホールという観客が約180名程度収容でき、音響・照明設備を用意した施設における一般市民対象の発表であった（2・3・2 写真4・8-2・9-2・10-1・10-2・12-2）。これに対し、第2回目の発表は、2月26日、付属第二幼稚園年長クラス親子約50名を対象にした「親子おにぎり作り教室」（於：付属第二幼稚園遊戯室）で、調理（保育学科学学生も親子の調理班に入って作業）・会食（献立：おひなむすび・豚汁・三色団子・うさぎリング）を行った後に、紙芝居を上演する予定であった。

この状況をふまえて、平成26年1月、冬期休暇明け最初の授業時に台本を推敲して本ゼミ紙芝居担当学生2名で読み合わせを行った。台本の主な変更点は、次の4箇所である。

- ①第1場面・導入のシルエットクイズの際、当日の献立にリングが含まれているため「ヒントは、みんながさっき食べた果物だよ！」という言葉をつけ加える。
- ②第4場面、リングに関するクイズの際、「次の3つから選んでね」と選択肢数を先に言う。
- ③第6場面、子ども達と一緒に唱える呪文「あっぷる・あっぷる・ぷっふるーん」の最後の部分を言いやすい「るん・るん・るん」に変更する。
- ④第1場面の導入・第4場面のクイズの回答後、第6場面の呪文と一緒に唱えた後、子ども達の状態に応じて声掛けできるように予め考えて練習しておく。（例）第6場面、1回目に呪文を練習した時、大きな声が聞こえたら「すごーい、みんな上手にできたね！」、声が小さいようであれば「よく聞こえなかったんだけど、もう一度やってみようか」などの言葉を掛ける。

上記4点を変更した台本に基づき、語尾までハッキリ伝わるように読み合わせを行った。

第2回目上演にむけた練習時に配慮したのは、発表施設（シーモールホール→幼稚園施設内の遊戯室舞台）・対象者数（90名→50名）・対象児の年齢（異年齢児→5歳児のみ）が異なる

点であった。発表施設と対象者の変化については、発表者4名全員が（賛助出演学生1名が1年生と交代したため全員2年生）、付属第二幼稚園で事前実習を合計4日間、体験しているため、予め発表する舞台の構造と対象者を事前に把握できている状態であった。つまり、創作物発表会の会場と異なる状況、具体的にいえばマイクやスポットライトは使えないが、子どもの表情・反応を近くで見られること、実習で園児と触れあった体験を基に事前練習を重ねることができた。

その他、第1回目の発表経験後、第2回目上演にむけた練習時の留意事項は次の通りである。

- ・初回より情感豊かに台詞をハッキリ言えるように練習する。
- ・マイクがない分、できるだけ大きな声で台詞を伝える。
- ・子ども達の反応に即した言葉掛けが出来るよう、反応を複数パターンに分けて練習を行う。

1月初回授業の台本修正・読み合わせ後、上記3点に配慮しながら4回の練習（1月2回、2月後期試験終了後2回）をへて、第2回目の上演に臨んだ（写真13）。



写真13 親子料理教室での紙芝居上演風景
（左：第4場面 リンゴのクイズ、右：第6場面 台風通過、平成26年2月26日）

上演当日朝、調理作業が始まる前に舞台上に紙芝居を設置し、立つ位置を確認して発表に臨んだ。会食後の上演では、第1場面の導入時において、ナレーターがクイズを出す時にヒントを言う予定だったが、リンゴのシルエットのペーパーサートを出した直後に子ども達から「あっ、りんご」「今日はウサギさんにした～」などの声があがったため、「そうだね。今日、みんなで食べたね！」などとナレーターが答え、予定していたヒントを言わずに対応した。また、第4場面のクイズでは（3種のリンゴの内日本最多種を3択で質問）、立ち上がって「はい」など、食卓から離れ舞台の前に来て、声を出しながら挙手する姿もみえた（写真13左）。このように当日の献立にリンゴが含まれていたこともあり、紙芝居鑑賞時におけるリンゴへの興味の高さが窺えた。

その反面、紙芝居の途中から私語をする子ども達の姿もみられた。筆者が担当する「食育表現ゼミナール」は、この「おにぎり作り教室」に平成21年度から参加しているが^(注2)、合計

5回の参加の内、観客である子ども達の集中度が最も分かれた舞台発表となった。その理由の一つとして、予定時刻より遅い上演開始であったことが挙げられよう。先述したように紙芝居の発表は、調理・試食後に行ったが、諸般の事情により予定より会食・紙芝居上演開始時刻が45分遅れた（12時15分に会食開始、12時45分に紙芝居上演開始）。従って、集中力が続きにくい状況にあったと考えられる。上演時、熱心な子ども約10名は、次第に舞台の前に集まって鑑賞していたが（写真13）、私語だけでなく上演中に歩き回る子どもの姿も複数みえる状況であった。

付属第二幼稚園での発表終了後、反省会を行ったところ、参加学生から次のような感想・反省が出た。

【上演発表後の感想】

- ・紙芝居上演前、導入で手遊びなどを工夫し、もっと全員が落ち着いた状態で始めた方が良かった。
- ・クイズや呪文など、元気な声と一緒に参加してくれたので、嬉しかった。
- ・みていた子ども達は一生懸命観てくれたが、途中から集中力が切れてザワザワしている子どもいたので残念に感じた。最初に「静かにみようね」など、もっと声掛けが必要だったかもしれない。
- ・ある保護者が、紙芝居の途中で食器の片付けをされていたので驚いた。子ども達が集中して見るためには保護者の協力も必要であることが良く分かった。
- ・（創作発表会では暗転していたので見えにくかったが）舞台からみて左右の端に座っている子どもから紙芝居の裏側（待機している3名）が見えやすい状態だったので、工夫する必要があった。
- ・初回の発表よりも、表情豊かで声に抑揚を付けて発表することができた。
- ・マイクなしで発表を行う場合、広い会場で予め練習を重ねるべきだと思った。
- ・協力して改良し、困難な状況にあっても最後まで諦めずに制作・発表する充実感を味わえた。
- ・楽しみながら食育活動を行うことにより、子どもの食についての知識が深まるのだと思った。
- ・卒業後も、食育について勉強をして、より良い保育を行いたい。

3 おわりに —感想・反省と今後の活動—

本稿では、平成25年度における食育表現ゼミナールの活動について、後期の大型紙芝居制作・発表を中心に報告を行った。本ゼミの目標である「『食育』に関する『言語表現』活動実践を通じた保育学科学生の資質向上」は、概ね達成できたと考えられよう。

本ゼミ所属学生は、前期「山口県の農産物」の研究調査・ポスター発表を中心に学修を進めることによって地元の農産物について知見を深めると同時により良い発表方法について実践的に学ぶことができた。後期は、「食育双六」作成・発表（5名）と「大型紙芝居」作成・発表（2名）に分かれて活動を行った。本ゼミ所属学生は全員、一連の活動を通じて、食育に対して考察を深め、媒体・表現の工夫について学ぶことができたが、後者の2名は、前期の研究発表の成果と直結した紙芝居の制作・発表を行い、より継続的な学習ができた。

担当教員の平成25年度学修成果に対する所感は、次の通りである。

- ①前期の「山口県の農産物」研究・ポスター発表を土台とした具体的な表現の探求ができた。但し、ゼミ内でも研究・発表に対して興味・関心の深さが異なり、学修成果に差が出た。
- ②前期の阿東地区リンゴ園への訪問取材、7月の豪雨災害後の電話取材を通じて、「地産地消」の重要性だけでなく、自然災害と農作物の関係について興味を深めることができた。
- ③通年の活動を通じ、食育やコミュニケーションに対して実践的に考察を深める事ができた。
- ④〈大型紙芝居制作・発表〉初回上演録画DVD鑑賞後、学生は自発的に改良案を出し、自主的に2回目の発表練習ができた。
- ⑤〈大型紙芝居制作・発表〉12月創作発表会・2月親子おにぎり教室、2回の発表とも本ゼミ所属の紙芝居制作者2名以外にも、賛助出演学生2名が率先して加わり、全員で協力して発表実践できた。

上記の内、特記すべき指導教員の反省点・今後の課題は、1点目の同じゼミ内でも学生によって研究・発表に対する温度差・成果の差が出たことである。この課題は、平成24年度の反省点にも挙げたが^(注5)、具体的な改善策は現在も模索中である。個人差を埋める援助の推進が必要とはいえ、興味・関心が薄い学生に対する教員の過剰な助言・干渉は不適切であり、むしろ「自己を客観的に振り返る」活動が効果的ではないかと感じている。例えば、前期のポスター発表・感想文作成は、その方策の一助と考えられよう(2・2・2)。その他にも上記④で挙げた「上演録画DVDの鑑賞・反省会」は効果的と考えられる。この上演録画の鑑賞会は、平成23年度に導入後、毎年継続している。鑑賞会では、自分達が上演した舞台発表を客観的にみることができるだけでなく、「この場面では、子どもが騒ぐ声が大きくなっている」「この場面は、スポットライトがもっと強い方が良い」など、上演時には把握できなかった観客の様子・周囲の状況が確認できるという利点がある。学生は、自分達の上演に対して「発表媒体制作者」「上演者」「照明・音響担当者」「観客の子ども」「観客の保護者」、複数の立場に立って鑑賞・反省することが出来、自ら進んで改善点を出し合い、2回目の上演練習に結びつく成果をあげることができた。このように上演録画の鑑賞会を通じて、学生達は自分達の活動を客観的

に観察した後、自主的に改善しながら展開してゆく力を持っていることが平成25年度の本ゼミでも確認できた。

従って、学生が自分達の活動を客観的に振り返る機会の設定は、今後、アクティブ・ラーニングを展開する上でも重視したい。今後も学生の資質向上を目指すと同時に、地域交流にも寄与できるゼミナール活動を展開することを目標としたい。

謝辞

平成25年度、食育ゼミナール活動を行うにあたり御教示頂きました「友清りんご園」様（友清達一郎様）、本学教員（栄養健康学科：塩田博子教授・芳賀絵美子助手）、所属・参加した保育学科学生（平成25年度：2年生7名（山本楓・山下美佳・石澤暁弥・遠藤春香・河野愛美・田邊このみ・古畑美月）、紙芝居賛助出演学生：2年生（12月・2月に出演：生越万里、2月に出演：市川舞夏）・1年生（12月に出演：林健太郎））、本稿に対して和文題名・要旨を英訳頂いたDavid Kalischer氏（もと福岡市総合図書館映像資料課勤務）に対し、記して謝意を表します。

本稿は、一般社団法人全国保育士養成協議会主催「全国保育士養成協議会第54回研究大会」（平成27年9月23日、於：ロイトン札幌）における研究発表（ポスター発表、B1-054）「食育表現媒体の作成に関する事例研究—大型紙芝居作成・発表を通じて—」をもとに作成しました。会場でご質問下さいました先生方（順不同）〔木村龍平先生（帝京科学大学 こども学部教授）、進藤容子先生（相愛大学人間発達学部教授）、新家智子先生（甲子園短期大学 特任専任講師）、若山育代先生（富山大学 人間発達科学部准教授）〕に対し、記して感謝の意を表します。

注) 参考・引用文献

- 1) 下関市編集・発行：「下関ぶちうま食育プラン」, 46pp., 2008年
下関市編集・発行：「第2次 下関ぶちうま食育プラン」, 50pp., 2013年
- 2) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告—「山口食育カルタ」制作を通して—, 下関短期大学紀要, 29号, pp.9-26, 2011年
- 3) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第3報—大型紙芝居制作・発表を通して—, 下関短期大学紀要, 32号, pp.35-54, 2014年
- 4) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第2報—「食育双六」制作・被災地送付を通して—, 下関短期大学紀要, 30号, pp.13-24, 2012年
- 5) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第4報—平成24年度の大型紙芝居制作・発表を通して—, 下関短期大学紀要, 34号, pp.1-18, 2016年
- 6) 河野光子・堀尾昇平・稲員祥子・高杉志緒：第3回 作品展と工作体験「みて、つくって、楽しんで—被災地の子どもを応援しよう—」開催報告, 下関短期大学紀要, 30号, pp.25-46, 2012年
- 7) 塩田博子・芳賀絵美子：付属幼稚園と短大の食育についての連携の試み—3年間の意識変容と事業評価—, 下関短期大学紀要, 28号, pp.43-54, 2010年
- 8) 平成25年7月28日に発生した豪雨災害に関する検証・検討会議：「平成25年7月28日に発生した豪雨災害に関する検証・検討報告書」, 山口市, 25pp., 2013年11月
- 9) 山口新聞社：豪雨に負けずリンゴ初売り 阿東の観光農園, 「山口新聞」, みなと山口合同新聞社, 2013年8月7日朝刊, 19面

参考URL

- 山口県食品産業協議会「まるごと！やまぐち net」
http://www.marugoto-y.net/nousuitiku/nousan/04_tomato.html (2016年12月現在「ぶちうま！やまぐち net」<http://buchiuma-y.net/>と名称変更)
- 徳佐りんご組合・徳佐りんご観光協会「徳佐りんご」<http://www.tokusa-ringo.net/index.html>
(copyright©2014 徳佐りんご組合)